

インド正量部の宇宙論的歴史における 人間と動物と植物の関係

岡 野 潔
(九州大学)

一、 今や誰もがエコ・システムの変化に危機意識を持たねばならない。インド仏教の立場ではそれをどう考えるのか。エコ・システムの問題は人間と自然の関係の問題であり、仏教徒にとってその問題はいわゆる漸次悪化史観と密接に関係している。

インド仏教徒は基本的に漸次悪化史観つまり「昔はよかったが、今は墮落し、未来はもっと悪くなるだろう」という見方をもって現在という時代を考える。阿含・ニカーヤ期の仏教徒が考えていた世界の悪化史観をパーリ長部の宇宙論的な二経、アッガンニャ経 (DN 27, Aggañña-suttanta, 略号：A経) と転輪師子吼経 (DN 26, Cakkavattisihanāda-suttanta, 略号：C経) の説くところから組み立ててみると以下のようになる：

食物の漸次悪化史観 —— A経によれば劫初時には人間は神話的な食物であるラサー (rasā スリランカの写本伝承を採用)、パッパタカ、バダーラター、自然稻を採取して食べていたが、現在では性質の劣った栽培種の稻を耕作して食べている。C経によれば劫末には諸々の美味 (rasa) すなわち熟酥 (sappi)・生酥 (navanīta)・胡麻油・蜜・砂糖黍汁・塩が消失し、稗 (kudrūsaka) が最高の食べ物となる。

人の身体の漸次悪化史観 —— A経によれば劫初時には人間の身体は

神々に近いもので、身体から光を発し、空を遊泳し、美しさに優劣はなかった。その後人間の姿は光を失い、美醜の違いが出じ、男女の性器が生じて現在のような姿になった。C経によれば劫末には人間の容色 (vanṇa) はますます衰える。

人の寿量の漸次悪化史観 —— A経によれば劫初時の人間は(神々のように) 久しく長い時を生きた (ciraṃ digham addhānaṃ tiṭṭhanti)。C経によれば最も幸福な時代の人間の寿命は八万歳であった。その後寿命は次第に短くなって現在では百歳である。劫末には人間の寿命は十歳となる。

このようにA経とC経は、食物と身体と寿量で劫初から劫末へ漸次悪化してゆく時代観を確立し、その聖典的根拠となった。

A経とC経の時代観を一層詳細化していった部派アビダルマの立場からさらに説明を加えるなら、正量部はA経の説く出来事のうち太陽と月の出現の事件までが成劫で、それ以後の事件は住劫の第一劫に属すると理解する。しかし有部は地獄における最初の有情の誕生をもって成劫の終わりと考えているから、有部がA経の説く出来事のどこまでを成劫に含めると理解していたのかは明らかではない。恐らくA経に説かれる盗み・嘘・暴力の最初の出現の事件の後の時代に地獄に堕ちる衆生が初めて出現したはずであるから、マハーサンマタ王の時代が住劫の初めにあたると有部は理解するのであろう。

成劫に起こる歴史的出来事は一大劫に一回きりのものであるため、A経の説く劫初時の出来事(ラサー等の神話的な食物の出現と消失)は一回性のものであるが、住劫に入ると各中間劫ごとに歴史の運動が反復されるようになる。アビダルマの住劫二十中間劫の理論によれば、人寿八万歳から人寿十歳への下降は、最後の第二十目の中間劫を例外として、どの住劫の中

間劫においても同じように劫末に向けて起こる。つまり住劫の初劫から第十九劫まで食物・身体・寿量の漸次悪化の運動は基本的に同一である。C経の説く人寿八万歳時の転輪王の人世の状態と、A経の説くマハーサンマタ王（彼は住劫に属する）の理想的な世の状態とを、同一反復と見ることによって、その後が続くであろう転輪王の人寿八万歳の世から人寿十歳の世への漸次悪化も反復されると見なすことが出来る。このようにA経の説く内容とC経の説く内容とを構造的に同じものとみなす統一理論がアビダルマで出来上がったわけである。

二十中間劫の理論では、墮落の運動に入る前にまず人寿を回復させる必要があるために、住劫の第二劫からは減劫の前に増劫、つまり人寿十歳から人寿八万歳への回復運動が、各劫の始まりにおいて起こると説かれる。A経の説くような劫初から劫末への人世の変化が単純に悪化の一直線の運動であるのは住劫の初劫までで、住劫の第二劫からは中間劫の前半に増劫、後半に減劫が起こり、中間劫は波のような人寿の上下運動をもつ構造になる。A経の中の所謂「アッガンニャ神話」(DN I, pp. 84-96) が作られた時期には恐らくこのような複雑な運動はまだ考えていなかったであろう。A経に見られるのは、単純に劫初から劫末への漸次悪化史観であり、それは人類のもつ最も素朴な歴史観でもある。C経になるとそれがやや複雑化して増劫と減劫の上下運動が考えられるようになるから、C経の方がA経よりも成立が遅いのであろう。

最初期の仏教の時代観をまとめる役割を担ったC経は、時代悪化の原因が十不善業道にあることを明確にした。なぜ現代という時代はこんなに悪化してしまったのか。それは人類全体の道徳性が漸次悪化してきたからである。C経の理論によれば、劫初においては十善業道のすべてが守られているが、劫末においては人の誰もが十善業道の一つすら守れなくなる。こ

のように各劫における十善業道から十不善業道への移行という視点から、現在という時代の悪化の理由が説明される。この人間の道徳的精神的な悪化と平行して進行するのが、外的世界の悪化である。道徳の悪化（身口意の不善業）は自然界の悪化でもある。劫初においては飢饉旱魃は存在しなかったが、劫末になるにつれそれらは増大する。大雨少雨旱魃などの気候変動や植物界の変化は人間界の悪と密接な関係があるという考えはインドに古来から有り、例えば悪王が悪政を行ったために旱魃が起り飢饉が生じるという見方がジャータカ等に出てくる。道徳の変化と外的世界の変化とは常に対応関係にあるために、道徳の漸次悪化史観から同時に外的世界（自然界）の漸次悪化史観も出来る。具体的にそれを表現すれば、それは次のようなものであろう：

自然の漸次悪化史観 —— 劫初時に器世間（環境世界）の住み心地はすべての生き物にとって理想的なものであったが、人間の墮落に対応してそれは次第に悪くなってゆく。劫末に近づくにつれ人間を飢饉に追いやる旱魃等が頻発し、自然の動きは人間の意に反するものとなる。

二．さて食物と人間の身体と寿量に関する漸次悪化史観は阿含仏教から大乘瑜伽行派にも受け継がれ、瑜伽師地論（大正 No. 1579）はそれぞれの悪化を、資具衰損（*upakaraṇa-vipatti*）、依止衰損（*āśraya-vipatti*）、壽量衰損（*āyur-vipatti*）という言葉で表現している。資具（*upakaraṇa*）とは生活に必要な品のことであるが特に食物を意味する。依止（*āśraya*）とは身体のことである。この瑜伽師地論の説く壽量衰損・依止衰損・資具衰損⁽¹⁾という哲学的な用語は、正量部論書の文献Xの内容を説明するのにも便利であるため、文献Xにはそれらの言葉は出てこないけれども、以下の説明

において時々それらを使いたいと思う⁽²⁾。恐らく文献Xの作者はこれらの三種衰損の概念を知っていたと思われる。

さて本発表で私が特に取り上げてみたい資料は正量部の宇宙論的歴史文献である Mahāsaṃvartanikathā (略号: MSK) と文献 X (『有為無為決撰』第八章中に引用された書名不明の正量部作品) にある記事である⁽³⁾。この両書の記事は、MSK の第二章以下に関する限り、同内容であって、MSK の種本が文献Xであると思われる。紙幅の制約上、本稿では専ら文献Xを用いて、その内容を紹介したい。

文献Xには、A経の中の人間社会の形成期の神話(いわゆる「アッガンニャ神話」DN, III, pp. 84-96)と内容的に密接に対応している部分を見出すことが出来る。その部分は、文献Xの§31から§97までである。この部分を「阿含のアッガンニャ神話の対応部分」と便宜上呼びたい。この「アッガンニャ神話対応部分」の前の、§2から§31までには、宇宙の成劫の出来事が詳細に語られている。その中の特に§2から§7までの部分は、長部パーティカ経(DN, III, pp. 28-30)ならびにブラフマジャーラ経(DN, I, pp. 17-18)に内容的対応が見出せる、大ブラフマー神(大梵天)が創造神に誤解される経緯を語った成劫開始の神話が語られている。この部分を「阿含の大ブラフマー神成劫開始神話の対応部分」と便宜上呼び、一つのまとまった構成部分と見たい。その部分の後に、ブラフマ世界から地上までの世界が順次形成されてゆく出来事が説かれる部分(§8から§31まで)がある。次に、文献Xの「アッガンニャ神話対応部分」の後には、内容的にはアッガンニャ神話のつづきというべき、A経には対応が見出せないその後の時代の興味深い記述が続いている。それは§98以降§131までで一つのまとまりを構成するとみてよい。この部分を「アッガンニャ神話のつづき」と呼ぶことにしたい。その部分の後、文献Xは§132から§146までは過去三仏、そ

インド正量部の宇宙論的歴史における人間と動物と植物の関係(岡野 潔) — 75 —

してその後の釈迦牟尼仏の出世と正量部の五回結集という現代の時代の記述に入る。§147以降は、未来の時代の記述になる。小三災による第九劫の終結、第十劫から第二十劫までの未来の時代が説かれた後に、壊劫の出来事、衆生世間の破壊と器世間の破壊が説かれる。これが§202まで続き、その後には理論的な要約と補遺的な説明がある。以上をまとめるならば、文献Xの前半（成劫と住劫の歴史）は次のように内容的に区分けされる：

- (1) §2～§7 阿舎のブラフマー神成劫開始神話に対応する部分
- (2) §8～§31 ブラフマ世界から地上までの世界形成
- (3) §31～§97 阿舎のアッガンニャ神話に対応する部分
- (4) §98～§131 アッガンニャ神話のつづき
- (5) §132～§146 現代の時代の記述
- (6) §147以降 未来の劫末時代の記述

これらの中で、阿舎・ニカーヤ聖典にある程度集中的・連続的に対応部分が見出せるのは(1)と(3)であり、それ以外の部分はさまざまな材料を用いて犢子正量部独自の編集によって出来上がった歴史的な神話である。(6)はC経の劫末に関する教義をベースにしているが、何かの経に連続的に則した内容をもつわけではない。むしろ後の時代に成立した独自の資料を使っていると思われる。

三．食物と身体と寿命に関する正量部の漸次悪化史観が特に出てくるのは、上述の(4)の時代の部分である。この部分を特に以下にとりあげたいと思う。その前に、アッガンニャ神話の内容について少しふり返っておきたい。アッガンニャ神話には、人間と食用植物の関係の歴史を語る箇所がある。A経の説く、初めの神話的な食物ラサーは植物であるかどうか不明であるが、その後に出てくるパッパタカ等はすべて植物と見てよい。A経は

それらの食用植物が消滅し変容した神話を説くが、その神話の根底には「人間の不善根（貪欲・高慢・怠惰など）に対応して、植物界が変化する（食用植物が消え、あるいは悪化する）」というルールがあると思われる。それは自然界と人間界の間にある目に見えないルールといってよいが、それに基づいて、A経はラサー→パッパタカ→バダーラター→野生の稲→現在の稲という食用植物の消滅と劣化の現象が語られる。

このルールがさらに、このA経の神話に対する『つづき』においても応用される。この『つづき』の後代の創作は、有部やパーリ上座部で行われず、犢子正量部の伝承で行われた。犢子正量部の文献において、完全に成長したアッガンニャ神話のつづきが姿を現わす。その伝承では、アッガンニャ神話の四姓の形成の時代から、現在の時代までの間を埋めるような、新しい神話的な歴史が物語られる。

文献Xの§98から§131までの、先に(4)「アッガンニャ神話のつづき」と名づけた部分をさらに細分化すると、五つの部分に分かれる：

(4-1) §98から§104まで —— 理想的な時代における植物界と動物界の出来事の説明（§98から§101までは植物界の、§102から§104までは動物界の出来事が説かれる）

(4-2) §105から§111まで —— 人間界の出来事の説明（§105から§108まではマハーサンマタ王の在世時代にすべての人間に資具と依止と寿命の三者の完全な具足があったことが説かれ、§109から§110まではマハーサンマタ王の死後に代々王が継承されたことが説かれ、§111から§112までは次第に大地は豊穡さを失ったため人間は耕作することが必要になったことが説かれる）

(4-3) §113から§119まで —— 耕作が始まった時代以後の植物界と動物

界の出来事の説明（§113から§116までは動物界の出来事，§117から§118までは植物界の出来事，§119はその植物界の悪化の結果としての寿命衰損が説かれる）

(4-4) §120から§126まで —— その後の植物界と動物界の出来事の説明（§120から§123までは動物界の出来事，§124から§125までは植物界の出来事，§126はその植物界の悪化の結果としての依止衰損が説かれる）

(4-5) §127から§131まで —— その後の人間界の出来事の説明（§127から§128までは『五濁』の時代の開始と人間の間に誤った思想が広まったことが説かれ，§129から§130まではその結果としての資具衰損，§131はその資具衰損の結果としての寿命衰損が説かれる）

(4-1) から (4-5) の，以上のような構成から，劫初から現代という時代に至るまでの間に，人間の資具衰損と依止衰損と寿命衰損が，何が原因でいかに次第に現われてきたかの詳細なプロセスを示そうとしたのが，この文献Xの意図であることがわかるが，その教説に見てとれるのは人間と植物界と動物界の相関関係である。人間の資具衰損と依止衰損と寿命衰損は，植物界と動物界の出来事と密接に関連している。植物界と動物界における悪しき変化は人間の傲慢と増大する欲望に起因し，それはめぐりめぐって人間自身の首を絞める結果になっている。人間社会を不幸にしているのは人間自身である。しかし家畜を不幸にしたのは家畜自身ではなくて人間であるから，人間はそれだけ罪が重い。動物が人間の欲望のせい不幸になると，まるで植物界が動物の代わりに人間に対して復讐するかのようになり，植物界に異変が起こる。人間界と動物界と植物界の三角形をなす関係をどうやら文献Xは考えているようである。文献Xは，人間界と動物界と植物界という三者の関係を次の三期あるいは三段階に分けて説いているよ

うに思われる：

人間と動植物界の関係の第一段階

- (1) 人間と植物の関係の事件・・・§§98～101
- (2) 人間と動物の関係の事件・・・§§102～104

人間と動植物界の関係の第二段階

- (1) 人間と動物の関係の事件・・・§§113～116
- (2) 人間と植物の関係の事件・・・§§117～119

人間と動植物界の関係の第三段階

- (1) 人間と動物の関係の事件・・・§§120～123
- (2) 人間と植物の関係の事件・・・§§124～126

この「第一段階」と「第二段階」の間に、マハーサンマタ王とその後の時代の記述の段落 (§§105～112) が入る。第一段階はマハーサンマタ王の在世までの時代にあたり、人間と動植物界の理想的なあり方が描かれる。しかし第二段階と第三段階はマハーサンマタ王のはるか後の時代、人間が自らの悪しき行為により徐々に不幸になってゆく時代にあたり、人間と動植物界の不幸なあり方が説かれる。

この第二段階と第三段階では、人間が動物に対して行った不正な行為がまず説かれ、次にそれに復讐するような植物界の悪しき変化が説かれ、そして人間の資具衰損と依止衰損と寿命衰損が結果として生じたことが説かれる。そのために第二段階と第三段階ではどちらも動物界→植物界→衰損という順序になっているわけである。

四. では、文献Xの§§98～131の具体的な中身を見てゆこう。文献Xはそ

れ自体がある大きな文献の圧縮された要約なのではないかと思わせるほどに、文体にきびきびした簡潔さがあるため、それを更に要約するのは困難であるので、訳文から枝葉部分を切っただけのものを以下にあげたい。これは文献Xの上記の(4-1)から(4-5)の部分にあたる⁽⁴⁾。

〔動植物界の第一段階： かつて植物は人間に最高の恵みをもたらし、動物は人間に自発的に乳製品を与え、調教の労もなく自然に馴れた〕⁽⁵⁾

〔第一段階（1）人間と植物の関係の形成 §§98～101〕

〔§98〕 稲は味が劣悪化した（アッガンニャ経の稲が変化した物語のつづき）。〔§99〕 すると様々な副食物（*anubhojana）、つまり大麦と小麦と胡麻とクラッタ空豆（*kulattha）と隠元豆（*mudga）とマーシャ空豆（*māṣa）が出現した。〔§100〕 この当時の胡麻や大麦は汁に満ちていた。〔§101〕 表皮や葉などが無い最高の砂糖黍が出現した。

〔第一段階（2）人間と動物の関係の形成 §§102～104〕

〔§102〕 雌牛たちも化生として（自然発生的に）生じ、牛は自発的に人に乳をくれた。〔§103〕 その当時は自然に（人間が労働しなくても）乳からバター（*navanita）、バターからサルピスの醍醐（*sarpīr-maṇḍa）、ギー（*ghṛta）からギーの醍醐（*maṇḍa, *ghṛta-maṇḍa）が出来た。〔§104〕 その後、象と馬など乗用獣の様々な種類が出現し、自ら進んで人間に馴れた。

〔第一段階から第二段階へ： マハーサンマタ王の時代からその後の人間の耕作の時代への推移〕

〔人間界 §§105～112〕

〔§105〕 サンマタ王に転輪聖王の七宝が出現した。〔§106〕 マハーサンマタ王は「人民を益する」あらゆる恩恵（*upakaraṇa）を有していたため、

すべての人間は幸福であった。〔§107〕彼のおかげで民衆は食物すべてを円満具足したため、極めて長い期間にわたって幸福になった〔資具円満具足〕。〔§108〕それらの衆生の身体は美しく、輝いていた。それらの衆生に早死することはなかった〔依止・寿量円満具足〕。〔§109〕その後久しい時が経って、サンマタ大王が崩御された。彼の子や孫など、多くの王子らが生まれては死んだ。従者たち(*parijana)もすべて死んだ。〔§110〕諸王により〔代々〕王に灌頂がなされて、王の血統が現在に至るまで継続している。〔§111〕かくして大地も漸次に〔豊穰さを〕潤らして、かつての完全なるありかたをまったく失い、新しいもの(若さ?)が減少することと結びついた。〔§112〕その時、残された人間たちは法なきことに陥ったことと、食物が尽きたことを見て、犁先(*phāla)をつけた犁(*hala)をまるで牡牛(*balivarda)の如く、自ら曳かんとした〔資具衰損〕。

〔動植物界の第二段階：動物が次第に道具化されたため、植物は人間の利用を拒絶しはじめる〕

〔第二段階(1) 人間と動物の関係の変化 §§113~116〕

〔§113〕その時、牡牛の群れのかしらは、人間たちにこう語った。『これらの犁を〔曳くのを〕よせ。わしらだけで〔犁を〕曳くべきである。収穫の時に、収穫物の一部を与えよ』と。〔§114〕このように約束をして、それから彼ら(牡牛)は農民の如く田を耕作した。人々は牡牛らに分け前の一部を与えた。〔§115〕馬と象なども同じように約束して、人間の乗物となった。〔§116〕牛たちが乳を自ら進んで与えていないのに、人は努力して(無理やりに)搾乳した。人々は集まって乳搾りをなした。

〔第二段階(2) 人間と植物の関係の悪化 §§117~119〕

〔§117〕砂糖黍は葉で自らの体を覆った姿となった。〔§118〕胡麻などの

食用植物は汁を次第に失った。〔§119〕このようにもろもろの食べ物は劣悪化したので、人間たちの寿命などもまた減少した〔資具・寿量衰損〕。

〔動植物界の第三段階： 人間の搾取と暴力のゆえに、動植物と人間との敵対関係が固まる〕

〔第三段階（1）人間と動物の関係の悪化 §§120～123〕

〔§120〕その後甚だしい高慢によって田の所有者は牡牛たちに〔収穫の〕分け前を与えなかった。すると牡牛たちは収穫の分け前を得られなかったので、犁を引くことに不従順になった。〔§121〕人々は牡牛たちの不従順を見て、かれらの鼻に穴をあけた。その時、牡牛たちの〔言葉を〕話すことも消失した。〔§122〕牡牛たちは憫れみなき人間たちに服従して、曳くのが困難な〔ほど重い〕犁やその他のものを、その力によって、曳きつづける。〔§123〕象と馬なども自ら進んで飼い馴らされなくなった。乗物獣は人に杖で打たれるので、嫌がるようになり、固い縄で縛られた。牛飼いは牛たちをだましだまし乳搾りした。

〔第三段階（2）人間と植物の関係の悪化 §§124～126〕

〔§124〕砂糖黍は〔厚い〕皮により覆われ、〔圧縮に〕努力することでやっと汁が出た。〔§125〕胡麻などもひどく汁（*rasa）を欠いたものとなった。〔§126〕そのような食物やその他の〔食物〕がひどくまずいものだったので、人間たちはさらにいっそう〔肉体の〕衰えを得た〔資具・依止衰損〕。

〔第三段階以後： 人間はさらに墮落し、動植物の恵みもさらに悪化〕

〔人間界 §§127～131〕

〔§127〕その後次第に『五濁』が墮落した世界に現われた。顛倒した見解をもつ者が、非法なる道の人々に教えた。〔§128〕顛倒した見解に従う

[結果としての] 不幸に苦しみ、生きるための食糧を求めてはなはだ [強く] 欲望を抱く人々は、農耕と牧畜と召使と商売などに従事した。〔§129〕その後食物全般が甚だ衰損した。大なる苦勞をもってしても、わずかな快をもほとんど得ることが出来なかった〔資具衰損〕。〔§130〕[人間の] 大なる勞苦によって作られた胡麻と砂糖黍などと、雌牛や雌水牛など [の乳] は、[また人間の] 大なる勞苦によって汁 (精髓つまり胡麻油・砂糖黍汁・ギー) を出した。大なる勞苦によって作られた穀物なども、堅さなどの欠点をもって現われた。〔§131〕その後、人々が劣悪な食物に親近したために、寿命などが大いに衰損することになった〔資具・寿量衰損〕。

五. まとめよう。私たちが「自然」と呼ぶものは、植物界と動物界とが一体として根底ですべてが有機的に結びついている全体的生命の感覚と切り離すことが出来ないが、そのような感覚を古代のインド仏教徒も有していたのではないだろうか。北方仏教のアビダルマによれば植物界は器世間に属し、動物界は衆生世間に属し、また植物は知覚がない (acetana) 非生命 (asattva) たる存在と見なされる。しかし正量部の文献Xで今私たちが見たような人間・植物界・動物界の不思議な三角形の関係は、インド仏教徒がこのような二種世間という、アビダルマの時代に確立された見方だけで自然を切り分けずに、植物界と動物界とは何やら根底で結びついていると彼らが感じていたことを示すものではあるまいか。

上記の文献X (§§98~131) を読んで感じるのは、どうやら食用植物の劣化の三段階が人間による動物虐待の三段階と結びつけて考えられているらしいことである。人間と動物と植物が目に見えないしかたで関わりあっている。人間が動物界を不幸にすると、動物界とは関係がないはずの植物界

を介して、その不幸が人間にフィードバックされる関係がぼんやりと見える。このことは、彼らインド仏教徒においても人間と動物と植物が互いに結びついた一つの全体（自然）と感じられているからではないだろうか。A経が説く、人間の道徳的墮落に対して自然がレスポンスを返しつつ人間に引きずられる形で外的世界が悪化してゆくという時代観の背後にあるものは、実は生命のすべてが根底で結びついているというアニミズム的感覚ではないだろうか。

仏教の自然観を論じる場合に、私たちは衆生世間という狭義の自然を「自然1」と呼び、その「自然1」の下に衆生世間と器世間の両方を含むもう一つの自然のレベルがあると考えて、それを「自然2」と呼んだらどうだろうかと思う。仏教では「自然1」しか自然と認めないのではなく、「自然1」の下に漠然と「自然2」のレベルがあることを感じていたと考えてはどうだろうか。インド仏教が——その基層において、またしばしば表層においても——示すアニミズム的感覚は、「自然1」を越えて「自然2」にも及ぶものであり、その感覚は大乗仏教の「仏性」の思想にしまい込まれて、やがて中国仏教において「草木国土悉皆成仏」という表現になって花開くのではないか。

A経と文献Xの歴史的な神話が語るところによれば、人間は稲の出現の頃から生き方が大きく変わり、十不善業道に陥った。人は耕作するようになってから自然が人間に対して昔よりも親切ではなくなったと感じている。動物たちは昔は自ら進んで人間のもとにやってきた。植物界は人間に豊かな恵みを与えてくれた。ところが今や人間に対してあたかも悪意をもつかのように、植物界が人間に与えてくれる恵みは乏しいものとなった。それはなぜか。A経と文献Xが説く人間の歴史は、いわば「人間の自我肥大に伴う世界の人間中心化の歴史」というべきもので、人間が自我中心になれ

ばなるほど、いかにそれによって人間が自然と切り離され、自然との関係が不幸なものになってきたかが明らかにされる。人間が自我の肥大を食い止めてはじめて、人間と自然との新しい幸福な関係を築くことができるという教えがここにある。また、文献Xは特に最近の時代における人間の罪の中で特に、人間が家畜の動物たちに対してとってきた無慈悲な行為を指摘する。今の人間が全体的に不幸であるのは、人間という種が今や生物の他の種すべてに対して不当な損害を与えつつけているからである、このまま人間が人間だけの繁栄を考える限り人間は不幸になるばかりだ、という誠めをこの聖典の記事から私たちは受け取るのである。

注

- (1) 瑜伽師地論は劫末時の説明で次のように説く（大正30, 286a6-13）：爾時有情復有三種最極衰損謂壽量衰損・依止衰損・資具衰損。壽量衰損者所謂壽量極至十歲。依止衰損者謂其身量極至一搩或復一握。資具衰損者爾時有情唯以粟稗爲食中第一以髮一褐爲衣中第一以鐵爲莊嚴中第一五種上味悉皆隱沒所謂酥蜜油監等味及甘蔗變味。
- (2) なお大毘婆沙論卷百三十三には壽量衰損・有情衰損・資具衰損・善品衰損という四種の衰損が出てくるけれども、この四種は文献Xの内容と合わないものであえて使わない。
- (3) MSKと文献Xの校訂本：Kiyoshi OKANO (1998)： *Sarvarakṣitas Mahā-saṃvartanikathā. Ein Sanskrit-Kāvya über die Kosmologie der Sāṃmitīya-Schule des Hīnayāna-Buddhismus*, Tohoku-Indo-Tibetto-Kenkyūsho-Kankokai, Monograph Series I, Sendai. 本稿における、文献Xの節 (§) の番号は、この書に従う。
- (4) この部分の文献Xのチベット文校訂テキストは Kiyoshi OKANO (1998), *op. cit.*, pp. 422-432 を参照。
- (5) この、括弧をつけて下線をした文は原文になく、私がつけた見出しである。以下同様。

